

戦後思想史に於る根拠地の思想

鶴見 俊輔

鶴見です。そんなにこの題について準備しているわけではないので……。題というものは、一言でぽかっと書いてあるので、その時に始めて、その問題についての自覚を持つわけなんで、別に、その問題について、専門家だと思わないで下さい。いつでも、その事について調べて来ているわけではないのです。戦後思想史の中で、根拠地の思想というのが、どういう位置を持つかという問題を考えて見たいのです。

戦後思想史というのを考えてみると、今は明らかに一つの切れ目に来ていると思います。そういう気持ちは非常にします。一つの時代がどういふものだったかということがわかってくるのは、その次の時代がそれとどう仕方で現われてくる時です。人間は、生れた時に自分として生れて、自分はこういうものだということが解っているわけではないので、他の人間があって、それと対立するものとして、自分というものが始めて、自覚できるわけです。だから、他の人間、他人を自覚する時に始めて、自己も自覚するわけです。時代というのもそういうもので、あれはどういう時代だったかという事を、自覚するというのは、その対立者が出て来て、始めてなのです。今度は、その対立者が、又終る時が来る

でしょう。しかし、その場合にも、又その次の対立者がつき上げてくる仕方で現われる場合に、なのです。今は、明らかに、戦後思想史の一つの時代に対する対立者が現われて来ている時なのです。その時代の胎動というものを感じるわけです。戦争が終った時に、私は二十三だった。おそらく皆さんの今の歳と近いと思いますけどね。そうだな、植谷さんはさっき聞いたら、昭和十五年生れだと云ったから、今二十八か。ええと、そうだな。二十八を始まりとして、いやもっと歳をとっている人、いるかな。じゃ、十八から二十八位までかな。ま、そういう時期に戦争の終りを迎えたわけです。私が独立して暮し始めたというのが、戦争の真中からなんで、軍隊にいくと財政上は家から独立しますからね。だから、二十からは親の金をもらわないで、暮してきたわけです。軍隊でいや応なく、自立したわけです。だから、二十三の時はいき活していた。それから、戦後思想史というのは私にとつてあるわけ、その時代というのが明らかに、今はもう終わったという感じを持ちます。なぜ終わったか、と云いますと、今まで戦後思想史という風な事で、いっしょに色々仕事をして来た人が、今完全にみんな批判される側にまわっているからです。我々がつき上げられる時代になったからなのです。だから、東大闘争なんていうのは、

それはもう非常にはつきりした形でね。私の友達は大東の中にいる人も多いですけども、だいたいそこで批判されています。

それはどういう事なのかというと、私なんかよりずっと若い人で、皆さんと年のくっついていて高島さんという人がいるんだけれども、その人が昨日とてもうまいことを云った。結局、今の学園斗争の本質は何か、というところ『身分としての知識人の終り』ということなんだと云うんです。知識人というのは、機能であるだけでなく、身分だったわけです。これは大体、江戸時代からずっと続いているわけで、明治に入ってからも続いているわけです。大学を出るっていうことは大変なことで、大学を出たなら、ある自分を約束されていた。その考え方が、素質の内容は変わっても、思想の内容がマルクス主義であっても、しかし、知識人であることは、自分であることをやめなかったわけです。で、マルクス主義は後にしりぞいて、軍国主義になって、ナチばりの思想というのが、知識の内容になって、それから敗戦ということになって、今度は又、民主主義とマルクス主義の中につめこまれたわけだけれども、いづれにしても、身分としての知識人という観念は江戸時代から明治、大正、昭和、戦後とずっと万世一系的につながっている一つの観念なのです。それは一つの観念なのです。それに対する徹底的な挑戦という形で学生の斗争は現われて来ているわけです。だから、自分は進歩的だとか、俺よりもっと悪い思想を持っている奴がいるじゃないか、そいつをやっつけてくれよ、な

んて云ったってダメなのです。学生の矛先というのは大学教授であり、評論家であり、そして同時に思想家であるような、そういう三位一体的な構造というものを耐えがたいものとして考えている。その構造を許すことはできない。もし学問に専念するならば、思想家面をするな。又、外でタレントばかりで喋ったりなんかしているものが、金をかせいでそれでいて、どうして、自分自身の将来をかけている斗争というものに、なにか参加している様な顔ができるのか。そういう問題のつきつけ方をするわけです。ここでは身分としての知識人という観念を、粉碎するという一つの運動があるわけです。この考え方が、旧世代にはなかなかわからない。東大闘争で、それは典型的に現われて来るわけだけれども、批判されている側に、坂本義和もいれば、丸山真男もいるし、大内力もいるわけで、マルクス主義・民主主義、みんな一諸君ただ。実存主義も。それらが徹底的に追いつめられていくプロセスというのは一体なんだろうか、というところ、その身分としての知識人の終りということなのです。だから、本当に何かをするならば、それは機能としての知識人でなければいけないんです。それは、徹底的にある知識をつくり上げて、それによって何かをつくるか、そうじゃなければ、知識がその有機的部分となるような何かのかかわり方をするか、どちらかなんです。この問題は、吉本隆明が出している問題と、非常に構造的に似ているということを考えて下さい。もう一つ、問題をずらして考えますと、私の知っている大変に

若い人で、二十二、二十三なのかな、京大でなぐりあいがあったでしょう。それで小指を粉砕されたんです。京都のべ平連の事務局長なんです。京大の工学部の大学院生ですけれども、この人がこんなことをいった。それは、日本の、つまり京大なんかの場合でしょうね。東大じゃなくて、京大なんです。教授連が被害者意識だけをもっているところに、問題があるというんです。自分達は被害者だ、学生にやられて、かなわん、かなわんと思って逃げまわっている、そのことに問題があるんだというんです。つまり、このKという学生は、教授たちが自分達が被害者だとはっきり思っているのもう救済のしようがないと云うんです。教授たちは自分達が加害者だと云うことを考えたことがないと云うんです。これは、戦後の時代、日本の知識人の一種の思想形態を実によく伝えている。これは負け方に原因があったでしょうね。敗れた後、すぐ占領という形になったでしょう。で、戦争責任の追求を占領軍が代行したという形をとったんですよ。そうすると、自分で戦争の始末をつけることができなかった。中国との国交なんて、まだ始末ついてないわけで。アメリカが日本のかたがわりして、中国との国交なんてやってくれませんか。アメリカがやってくれなかったものは全部、未決のまま残っているわけだ。軍国主義的な知識人の追放なんてのも、アメリカの指令でやったわけで、後、それはアメリカが、又自主的に彼等を復権させたから、結局もとのもくあみになったんだ。こういうプロセスで、自分達で自

分達の悪を追求するということはないんで、戦争中も被害者だったし、戦後も被害者だという考え方が、ずうっと続いているわけです。加害者としての自分達を、意識したことがないんです。だから、今度学生に批判されても依然として被害者だと思ひ込んでいれば、彼らにはもう救いはないでしょう。こういうふうにして、戦後二十三年間経ったわけですが、二十三年をひとまとめにして、これをつきはなす事態というのか、ここに明日にあるわけです。これは、マルクス主義か・非マルクス主義か、共産党か・非共産党か、実存主義か・プラグマティズムか、というものを超えた一つの問題だし、それこそ、これは一種の精神の動きとしか、いいようのないものです。この被害者・加害者のからぶりに注目しろというのは、小田実の言葉なので、吉本と小田というのはある意味で、戦後思想史の前段階をしめくくり、止場する人間として現われた。

全部が再編を要求されている今というものがあるわけです。学生そのものは、自らを再編する必要を、今持っていない。なぜかという、若さという特権があるからです。いまだかつて、何もすることがなかったから自分達が何かしたことに對する責任を追求されることはないわけです。しかし、そういう無責任な状態に無限に留まることは、できないでしょう。やがては、自分の責任を追求されざるを得ないでしょう。その時、やっぱり自分が振り上げたゲバ棒によって自分が制裁されなければならない時が

来るでしより。だから結局、今いっていることは、自分に帰って行くし、今たてる原則によって未来の自分を再編せざるを得なくなるでしよう。その問題は、一言でいえば、身分としての知識人の終焉という事です。そういうふうな責任のとりかたとして生きてゐる若い人というのは、すでに現われてゐるわけです。大体安保斗争の敗北以後、この傾向は続いているわけで、非常に沢山の人間が学校から離れちゃって、自分の商売をしている人が多いですね。八百屋をやるとか、小間物屋をやるとか、そういう様子を暮しをしている人が多いです。大蔵省の役人になるとか、外務省の役人になるとか、大学教授になるとか、いう身分としての知識人になることを要求しない。だけど途中から、そういう自主コースから離れて、やっぱり身分としての知識人の位置を獲得した人もいます。しかし、そういう場合は、問題は振り出しにもどるので、我々が問われていると同じタイプの問題の前に学生もまたやがて立たされるわけです。だから、そういう再編の要求に対して、問題は二つになるでしよう。一つは、そこで我々はどうするか。つまり、私のような古い年令のものはどうするか。それから、そこで、あなた方はどうするか、いつまでも若くはあり得ないんだ。その二つの問題があると思うんです。それと根拠地の思想の問題は、明白にかかわると私は思うんです。

第一の、それで我々はどうするかという問題を、私はいくらか、（私と同じ年配の人は皆さん方の中にはいないわけで、余談にな

るんだけど、やっぱり自分の責任を不在にするわけには行かないから）雑談的にお話ししますけれども、学生が我々につきつけている問題というのは、なぜお前は生きてゐるのかという問題です。もしりっぱに生きていけば、四十以上の人間なんていうのは、あの戦争の終りまでに死んでゐるはずなのです。反戦活動というものをまともに取り上げてやれば、皆、殺された。だから、戦争以後まで生き残って戦後の時代に入った人間というのは、まあかしだったから生き残った。当り前の事です。それをまず、受け入れなきゃいけない。なぜお前は生きてゐるのか、その問題を自分に問うことなく暮すことはできない。やっぱり、そこに、加藤代行とか、大内力代行の代行といった人達の問題があるんじゃないでしうか。

それから、大学というものに入っていくとして、大学というのは、知性による集合であるはずですよ。ところが、なぜそれが知性自身のルールによって結合できないのか。学生がゲバ棒持ってなぐってくるからけしからんなんて、平然と教授はいます。そして、機動隊を呼んでなぐらせるわけです。しかし、なぜ機動隊を呼んでなぐらせなければ、学校の秩序は保てないのか。結局、近代とかなんとかいうのは、全部機動隊の助けを借りる種類の近代にすぎず、ミリタリー・モダナイゼーションです。アメリカの近代化というのは、ヴェトナム戦争の脈絡で見るとそういうものです。今の大学の姿勢もまたそういう意味での近代化でしう。

だが、そうだとすると、我々の側はどういう風にしたらいいのか、という問題が別にあります。

学生に関しては、ほとんど影響力はなかったらしいけれども、私に対して非常に衝撃を持ったのは、作田啓一のやり方なんです。教師に対してもかなりの影響を持ったと思います。作田啓一というのは、『恥の文化再考』という本を書いた人で、恥が大切だということをいっただけです。今のような状態では、自分が何をすることも出来ない。ただなぐりあいがあって、失明する者が出る。そうすると、何もできないということで、普通だったら何もしないです。ね、傍観者として。しかし、傍観しているというところが自分に許せないわけで、つまり、自分が無力だということに、その状態の自己認識のために、ある種の積極的な表現を与えようとしたんです。それは、雪の降る日に外へ出て、二日間断食するという、そういう行為なんです。これはある種の血路を聞いたと思います。それだけの責任は、誰しもが感じなきゃいけないものじゃないでしょうか。それが最低の責任感だと思うんです。学生は暴力的だから、機動隊を呼んでなぐらせるというのは、教育者としてよくないし、だから機動隊もいけないというって、全体を傍観しているというのも、これは大学にいるということの意味を放棄したことになるんじゃないでしょうか。

私は、自分の今いる大学というのは比較的静かなので、あまりまだ追いつめられてはいないんですけれども、これから追いつめら

れるかも知れないが、よくわからないんです。しかし、自分自身の方法というのは決めて置かなければならないんで、私はもし大学が機動隊を呼べば、そこで辞職しようと思っているし、そういう自分の原則というのは、常に人にもいつて歩いているので、同僚に対して影響を与えず、大学の責任者に対しても影響を与えないならば、自分の意見が用いられないわけだから、そこで、一刻の説得の努力もしないでやめようと思っています。それが一つの条件です。もし大学が機動隊を呼ばないならば、大学の側に立って、何かしようと思っています。その場合に占拠ということは、

くり返し、今までにおこったことですが、一つの建物が占拠されたならば、その建物は教授の側は使わなきゃいい。もう一つの建物が占拠されたら、それとも使わなきゃいい。で、学校にある全部の建物が占拠されたならば、学校のキャンパスで授業したらいい。雨が降ったならば、傘をさして講義したらいい。それでキャンパスが一杯になって具合が悪いんだったら、自宅に呼んで講義をしたらいい。今の学生は、勉強する気のある学生というのは非常に少ないんですから。ま、十人に一人いるといったら少し過大評価だと私は思いますね。(笑)

十人に一人以下です。だから、自宅でコーヒートとケーキ付きでサービスして講義をした所で、そんなに破産する程じゃないのです。やれるはずですよ。もし、そういう風なことを三六五日、徹底的にやりきることができれば、一つの大学が、それはその大学と

しての精神の更新になるでしょう。その辺からやり直さなければ
大学には救いがないでしょうね。一年でたりなければ、二年やっ
たらいいんです。二年で足りなきゃ、三年やったらいい。そういう
風な仕方では、始めて大学のうまれかわりがあり得る。そういう風
な私の考え方を、私のいる大学が受け入れるかどうかは疑問です。
予想して見ると、機動隊をいれるでもなく、今ここで言ったよう
な方針をとるでもなく、うやむやにやるんじゃないかという気が
します。ま、それはそれで、今云ったような仕方でもやり得る大学
が、日本の中でいくつか出て来れば、その事がきっかけになって
何か動きが出て来るんじゃないでしょうか。それはどういう場合
にも、自分自身の責任がなければ、この話ではできないということ
になったんで、話したわけなんですけれども、作田啓一の場合も
あるでしょう。それから、高島氏がおもしろいことを言いました。
立教の政治学の助教授なんですけれども、もし、占拠がおこった
ならば、自分と同じ様な考えを持っている学生何人か、それは少
数者ですがね、といっしよに、バリケードの中に入る。それで、
講議を続ける、それは三派そのものが、自分の思想と同じ場合に
す。つまり、五人でも六人でもいい。バリケードの内側にいるこ
とが自分の責任である。結局、自分は教授であることによって一
種の賤民だという意識を抜けることができない。つまり、今まで
身分としての知識人の位置を享受してきたということが、逆にい
えば、今は賤民だったということなんです。やっぱり、その立場

というものも、あまんじて受けなければならぬと云うんです。
それぞれ、そういう風にして一人一人が考える他ない、という状
態、そのことは健全だと思ふんです。自分にショックを与える様
な事件が同時代におこるということは、我々が幸運だということ
なんです。今、こういう風な流動状態がおこるっていうことは、
非常に、自分に底の方から明るい感じを与えますね。こういう流
動状況がおこらないで、おさえ込まれたらどうなるんですか。つ
まり、大学ではマルクス主義でも民主主義でも非暴力直接行動の
思想でも、なんでも教えることができて、しかも大学は全体とし
てアメリカと通々で、そのアメリカからもらった金でアメリカへ
いったり、こっちへきたりできて、米軍基地は依然としてあって
総理大臣はアメリカのいうままに……。そして全く風一つた
ず、大学に於る講議は自由に行なわれている。これは、絶望的な
んじゃないですか。その状況に比べれば、今、学生が騒いでいて
大学教授なんていうのは全く信頼しないっていうのは、健全なこ
とですよ。何ともいえず明るい感じを持ちますね。自分自身が困
るのは、別の事なんです。自分自身が困ったら、世の中、真暗だ
っていうのは、たいへん、素朴な考え方では、それでは実質的な知
識人とはいえない。やっぱり、今はいいと思ふんです。だから自
分が学生になぐられるとしても、今はいいっていう気持ちを捨て切
れませんか。そのところがなきゃ、しょうがないんだ、と思ひ
ます。それは私の話です。

そこで、皆さんはどうするかという問題です。皆さんは非常に近い内に、若くなくなるでしょう。そして、どうするかという問題です。ここで、根拠地というのが必要になる。皆さんは若いから、今、根拠地みたいなものがあって、それを追っていると思っているでしょう。しかし、根拠地を必要とするのは、斗いに疲れた時なんです。斗いに疲れた者が休める場所というのが、必要なんです、そういうものなんです。大体、来年は相当自殺者が出るだろうし、きちがいになる人が、相当でるでしょうね。ノイローゼの人間の数というのは、莫大なものになるでしょう。そこに行つて、ゴロンと横になつていれば、ゴロンと横になつたまま五日でも十日でもいられる場所っていうのが、人間にとって必要なんです。そういうものをいたる所に作らなきゃいけないんじゃないですか。もし、それが更に他の条件を充せば、つまり、外の力に対して相対的に自立できれば、それに越したことはない。つまり、水は充分にある、塩がある、イモくらいなら作れるという風な条件です。魚が獲れる、そういう風な条件を充している所が、日本にどれだけあるか、という風な問題です。いわゆるヒッピーの作っているスワノセというのは、ほぼその条件を充たしていますね。ただ、暮しの水準は非常に低い様です。今のところ、そういう風な自立的な共同体を作ること成功しているのは、極くわずかしかないんですけれど、山峯会の春日山というのは、ある程度自立しているでしょうね。

中山ミキが生きている時には、天理教っていうのは、そういう意味での一つの根拠地を形成したんです。これは、幕末にできたものなんで、明治維新政府が対抗して、九十を越している中山ミキを牢屋に入れても、その信徒は屈しなかった。中山ミキは、もちろん屈しないし、国家を相手にして闘うことのできた、最初の集団でしょうね。ところが、中山ミキが死んでから、その子供は今の血統は伝っていますけれど、国家権力と妥協しちゃったんです。だから、満州事変なんて起つてからは、平和運動なんていうのは、その正統の天理教から起つたことではない。根拠地はあるんです。天理市っていうのが、そうです。ところが、天理から分派した天理本道という宗派は、天理教の本来の意味からいって、戦争には反対だといつてがんばったんです。それは、戦争の終りに釈放されています。反戦運動としては、大変見事に闘った組なんです。ところが、反戦運動に見事に闘うと、それが伸びる力には決まらなっていないんです。これは、歴史のパラドックスなんです。羽仁五郎にはいいところはあるけれども、歴史は諸君に味方するといっているが、それはどういう意味で味方するのかということ、は、いわないんです。(笑い)それは、皆にいい目を見せてくれると思ったら、まちがいですよ。反戦運動をやった、あの今の根拠地集団というのは、戦後、その反戦運動は、実った平和国家になった戦後で、非常にいい位置を与えられて発展したか、といえ、全然そんなことはないんです。天理教は隆盛です。戦争

に協力しつつ、一つの都市を作ったわけですから。根拠地としては成功しています。しかしこれは思想的に天理本道ほどの意味はない。国家の思想と同じなのだから。アメリカが、日本を支配すれば、アメリカの思想と同じになる。大本教は実によく闘いました。しかし大本教というのは、戦後二十三年の脈絡の中で云えば、最も伸びない集団です。キリスト教は、大体において戦争に協力し一生懸命、戦争と闘ったわけです。その結果、戦後は大体、繁栄しています。だから、今日まで機動隊を導入した大学で、七つある中の三つは、キリスト教の大学であるというのも、偶然ではないんです。(笑い)つまり、学生が騒ぐとすぐに、機動隊に電話をするという関係は、戦争中成立した、その関係なんです。戦争に抵抗したキリスト教の集団は、ホーリネスとか灯台社ですが、ところがホーリネスの場合、ホーリネスで、反戦のために闘った人というのは、非常に若い北海道の副牧師で、この人は獄死した。しかし、ホーリネスが戦後に出来た歴史には、その人の名前さえ書いてない。つまり、反戦運動と関係ないわけです、今のホーリネスは。それから、灯台社の場合、その灯台社の反戦運動を指導した人は、明石順造という人で、その仲間は大体獄死しました。明石順造は生きて牢獄から出て来ました。しかし、アメリカの本部の方針とあわないので、除名されてしまい、田舎で死んでしまったんです。日本の出した、何千万円という金で作って出したキリスト教大事典という本には、明石順造という名前は一行も出て

いません。戦争に協力したキリスト教徒の名前は、いっぱい出ています。しかし、反戦のために、最後までがんばったキリスト教徒の名前は抹殺することになっているのです、日本のキリスト教というのは。私のいる同志社大学は戦争に協力したために、今日も繁栄して、(笑い)日本の有数の大学になっています。そういうことです。

だから、歴史は諸君に味方するというのは、よくよく考えて見なければいけないことで、もちろんある意味では味方します。しかし、それは少なくとも、いい目をみせてくれるということじゃないのです。だから、天理教のような意味での根拠地をつくっても、しかたがないということとは、あります。そういう停滞的なものは、どういう風にしたらそうじゃない種類の……。国家権力の支配というのは、これからも相当長く続くでしょう。これは、核の時代には明らかに時代遅れなんです。これは、つぶさなければならぬと思うんです。で、これに抵抗を続け、最後にはこいつに打ち勝つような種類の根拠地というのは、どういう風にしているのか、問題です。ただ単に、共同体を作っただけでは、足りないと思うんです。山岸会というのは、私はとてもいいものだと思いますし、山岸会員ではあるんですけども、あの教祖が死んでから、やっぱり停滞的な様相を深めているんじゃないでしょうか。山岸会に皆さん、行かれた方は何人か、いると思いますけれども、あのテキストは、なかなかおもしろいですよ。あのテ

キストの底には、いろんなかくされているところがあるっていう感じがあります。山岸已代蔵のは、一種のアナーキストで、だから国家権力というものに立ち向うという姿勢は出しています。

この考え方というのは、山岸会のメンバー全部に通じているものじゃないんです。あそこに来たメンバーというのは、やっぱり、私利私欲を捨てて、共存、共栄して安心したり、お金をたくさんもうけたり、金のもうけあいで競争することに耐えられないわけです。金銭から自由な、そこにいたら手ぶらで飯が食えるという風な社会に来ると安心しちゃうわけで、それ以上のことは望まないわけです。警察に対していろんなことをやったりなんて、それはもうごめんなんです。そうすると、そこではもう国家を批判しようという原理は失われていくわけでしょう。そういう可能性は、山岸会はすでに持っていると思います。しかし、まだ希望はもてますが、教祖の問題というのは、非常に難かしいタイプの問題なんです。大本教も、教祖のの出口王仁三郎が死んでから、非常に停滞的になった。一種の貯金を、たじじと持っているという感じになるわけです。一種のなつかしのメロデーみたいなもので、国家に対する平和主義の運動としてのびてきているとはいえませんが、これも一種の根拠地です。満州事変が始まってから、中日戦争のあたりまでは、実にたくさん人間が、もう共産党員なんかではないけれども、疲れはて、破れはてた人間というのがあそこに行けば、かくまってもらえたんです。それだけ出口王仁三郎と

いうのはふところの深い人間だったわけです。

だから、どうしても、内側と外側とをつなぐやつ、つまり出るも自由、入るも自由というふうなタイプの内と外という関係を考えて行かなければ、だめでしょうねえ。ゲリラの根拠地というのは、基本的にそういうものじゃないんですか。もちろん、最も成功した例というのは、延安なんです。これは根拠地をつくり、一旦負けた中国の共産軍が、大長征をやって、延安に入って、そこを根拠地にして、ついに中国全土を自分の手にとりもどしたわけです。だから、そういったタイプの大きな運動を計画できない場合には、いくつもの自立的な根拠地をつくっていったって、そこから出撃するという風な形になっていくやり方と、これは武装をとまなうが、武装ではないか、ということとは、かなりの別れ目になるでしょうね。武装ということを考えるのは、ゲバラの考え方です。しかし、非武装の出撃ということもありうるわけで、そういうものは、アメリカの中には、今、相当できています。アメリカ・インド人のリザベシヨンというのがあるでしょう。あれはその為利用されているそうです。レザベシヨンというのは、アメリカ・インド人がある土地を与えられるわけです。与えられるというのは、実にバカげた話なんです。もともと全部、アメリカ・インド人の物だったんですけれども……。だから、自分のものだったものを、もらうというのは、変な話なんですけれども、ある特権を与えられているんです。特権じゃないんです、それは。そ

れはかなり広大なところなんです。ヒッピーで、彼らと交渉もっている人間っていうのは、そこからそこへと、動いていくことが可能なんです。だから、普通の白人のような資格で、白人の労働者もそうですが、家族があれば二台自動車をもつでしょう。

二台を三台にするか、なんて考えるのは今のアメリカの労働者の問題です。だから、反戦運動なんて起らないわけです。普通だったら、三台持っている。一家六人だったら、三台自動車があつて普通なんです。で、都市から一時間位ドライブできる所で、小高い丘に、二階建ての家をもつて、というふうな状況をあきらめるわけです。そして、お互いに週二回位、ブリッジのパーティを開いて、コクテルを飲んで、ブリッジをするというような暮しの形態をあきらめてしまうならば、ほとんど無収入で、何年でも動いて、インディアン・リザベーションからリザベーションに働けるような種類の流動状況ができています。

スナイダーという詩人がいて、私は親しくしていたんですけれども、去年の十一月に帰っちゃったんです。で、どこに住むのかとたずねたら、住所は仮りにここにすればいい、といって妹の家を教えてくれて、帰ったら一年間は完全に放浪するつもりだっていうんです。妻君がいて（妻君は日本人ですがね）赤ん坊をつけてそのまま、ただ放浪しているんです。あっち行ったり、こっち行ったり、インディアン・リザベーションからもう一のリザベーションへ。そして、その目標は、だいたい一九七三年までは、

情況は決定的には動くまい。だが今、ニクソン政権でおこっているのは、アメリカにとっての最後の反動時代だろうというんです。この間に反戦勢力が負けることはない、黒人はもう後には引けないんですから。ある時から急におとなしくなってしまうなんて考えられないわけです。そこで、反戦のゲリラの力というものを、色々なところで、拠点がしっかりした所で、再編成する。その時期は今から七三年までの間だというんです。それで、七三年以後は、次々に反撃ができるような、連鎖的な反撃ができるような状況をつくって、もう後がえりができない、このような反動時代がもう起らないような状況をつくるという考え方なんです。それはインディアン・リザベーションを根拠地として、そこからいろいろと動ける。だから、そこにいれば、インディアンと同じような暮らしをすれば、イモでも何んでも食ってやれるわけです。スナイダーは日本にいた時も、スワノセなんかについて、二ヶ月くらい帰ってこないんです。妻君と赤ん坊はぼっぼりっぱなしで、京都に。魚を食って、いもを食って暮しているわけです、裸で。もっぱら、赤いふんどし、しているって言っていました。男も女も裸で、雨が降ると、それが風呂になるそうです。そういうふうな暮らしに耐え得るので、アメリカに帰った場合、別になんにも問題はないんです。彼はかせぐ能力を持っているし、新作の詩の朗読をすると、千五百人の人が聞きに来るそうです。今、アメリカではギンズバークに並ぶ人気のある詩人です。学者でもあって、人類

学者です。だから、そういう人間は、それはもう身分としての知識人じゃない。自分が詩の朗読をすれば、千五百人は確実に集まるといふような人間が、日本に一人いるとしましょう。現実にはいないけれども。いないんです。いないと思います。(笑い)

つまり、今日日本で一番偉大な詩人、誰だかよくわからないんですが、まあ鮎川信天夫として、それが新作の詩の朗読会を開いたら千五百人、集らないです。その人が演説をしたら、千五百人は集まるという人がいたら、だいたいそれはすごいばっていて、自分のギャラはいくらだとか、一等車でなければ来ないとか、いろいろな条件をつけるでしょう。それが日本の今の文化の水準です。しかし、スナイダーの基準というのは、そうじゃないんです。自分のしたいと思うことは、するわけです。だから、スワノセに行けば、日常の労働は全部やるし、食うものはイモと魚なんです。アメリカに帰れば、一年は計画的に放浪しているわけです。定着することは、もちろんあり得る、定着を恐れず、放浪も恐れず、その二つの事の組みあわせです。このことが、停滞から救うんです。

根拠地の問題というのは、閉されたユートピア共同体として理解することは、間違っていやしないか。私は山岸会の問題では、そのところがいくらか、欠けているような気がするんです。そうすると、抵抗の根源というものがなくなってくるんです。つまり、全員一致ということに、あまりに重きを置きすぎて、その

社会そのものを作りかえるエネルギーが出て来る場所がなくなるんです。だから、こういう皆のやり方は、間違っているんじゃないかという疑いを持ったら、一人であっても、その疑いに徹底的に固執することが大切なんです。この原則は、山岸会にはありません。基本的に問題なのは、一人は自分ひとりの意見を尊重するということなんです。いい社会というのは、多数の人間に、常に服従するという社会じゃないはずなんです。これは、議会制民主主義が、今、どんなに腐敗しているかを見れば、明らかです。多数は自民党を支持している。一体、多数の意見というのは、何なんだろう。問題は、少数者の専制制度だから、少数者、それは倒さなければいけないという風なことではないわけです。それだけにつけるのではなくて、多数の専制であっても、それは打ち破らなければいけないでしょう。一人が、自分の中に深く聞き入って、究極的に、これは正しいという風に考えたら、それによって立つことができような、そういう社会が重大なんです。そのことは言いかえれば、根拠地を作っても、その中である個人の思想が、圧殺されないようにすることです。分離も自由だし、その根拠地の中で、その個人が生きることも自由であるような、そういう形じゃないでしょうか。言いかえれば、これは内ゲバに対抗する原理を組織論として確立するということです。これはもう非常に難かしいタイプの問題です。今までの天理の場合にも、大本の場合にも、山岸会の場合ですら、又、心境部落の場合にも、自分達がともに

と少数派として迫害されている場合には、それに対抗して、それを作ったのだけれども、自分達の社会を作ると、今度は停滞的になってくるんです。コンセンサスの尊重ということなんです。

アメリカの歴史が、大体そういう風なんです。ヒューゲノーツとか、ピューリタンなどは、ヨーロッパから迫害されて逃げてきたでしょう。その時はヨーロッパでは少数派なんです。ところが自分達で社会を作ると、それが多数の専制を敷くわけです。だから、これに対応する。これに抵抗する原則というものが、そこに置かれなければいけないでしょう。一人の人間の意見が重大なんです。一人の人間は、たった一人しか、そんなことを言わないじゃないか、といって圧殺されないような原則を保つことが、重大なんです。これは、マルクス主義の中で展開されていない一つの重大な原則でしょう。私はその一点で、マルクス主義を全体として受け入れることができません。マルクス主義は、全面的にまちがっているといっているんじゃない。しかし、私はマルクス主義に対抗する別の原理・原則がなければ、マルクス主義を受け入れることはできない。ソビエトの中では抵抗権の保障というのはないわけで、だから、ソビエトの社会はいいというふうに考えることができない。アメリカがいいというんじゃないんです。全部を作りかえる様な、そういう原則が必要なんで、その時には、多数の尊重ということだけではない種類の原則がなければいけません。やっぱり、根拠地の思想が、今まで失敗してきたのは、そ

のことによるところが、多いんです。そこでは、今の内と外のこととが、問題になるわけです。外に出るも自由、内に留まるも自由、内の中に、又、外があるような、そういう種類の規則が重要なのではないのでしょうか。

今の日本の中にある問題というのは、始めにいったように、自分の姿勢が共産主義であるとか、マルクス主義であるとか、自由主義であるとかということだけでは迫害されないよう種類の社会が、戦後に出て来たわけです。戦前は、そうじゃなかった。自分は共産主義を信じるといっただけで、迫害されて、大学なんか位置を持たなかったわけですが、今はそうではなくて、共産主義の講義を大学でやることもできるわけです。にもかかわらず、そのことによって、全然この社会はゆるがず、キチツと残されたままで、アメリカと自分達と通々になっているような状態が出てくるわけです。そうすると、これはどこかで断ち切らなければならぬわけです。その断ち切る一種の象徴という儀式が、ゲバ棒なんです。あのゲバ棒というのは、おもしろいものです。日本の社会と自分との間の循環を断ち切る一種の儀式なんです。この場合相手を殺すということは、考えないんですけれども、やっぱり自分は日本の社会に組み伏せられないという、一種の姿勢を確立していくわけです。そういう風にして、日本の社会と全面的に対決するという姿勢は、もたなければいけません。ずるずるに癒着していけば、自分はマルクス主義者であることを放棄することも

なく、又、自分が自由主義者であることを放棄することもなく、そのまま体制の一部になってしまふ。それが、今恐ろしいことです。だから、ゲバ棒さえふりまわさなければ、マルクス主義者である学生は、そのままマルクス主義の認識を深め、大学に於ても優を常にとり、大蔵省にだって就職できるんです。外務省はもちろんのこと。戦前には、その種類の恐ろしさはありませんでした。これに対して、はっきりこの問題を自分の前に見据えたというのが、今の学生の運動ではないでしょうか。やっぱり、それまでの人間、戦前のつながりを背負っている、戦後の知識人というのは、その問題を見ることはしたくないんです。見れば恐ろしいわけです。そこに、今の問題があるような気がします。結局、それは知識人というのは、常に被害者で、いいことをいろいろ考えるんだけれども、その意見が用いられないとか、そういう風にして嘆いているわけです。外務省の官吏、大蔵省の官吏で、そういうのはいっぱいいます。つまり、相当の高官になっても、大臣になっても、被害者意識をもったまま、そのなっていくわけです。そのことは恐ろしいわけです。つまり、自分は加害者になり得る、その加害者になり得る自分を批判して、それを断ち切るということが、問題なのではないでしょうか。

ここで自分の土地をアメリカ軍事基地にとられるということは被害者なわけです。だから、被害者だから抵抗するということはもちろんあるでしょうが、そこだけ見ていたんではダメなんで、

軍事基地を提供してしまえば、自分はそこから加害者になるわけです。ベトナム戦争なんかで、それは使われていくでしょう。現実として。そのところから目を離さないというところに、ここに住んでいる人達、基地反対をしている人達の思想の意味があるのではないのでしょうか。しかし、もし、その被害者としての自分だけを考えていくならば、その側面においてだけ自分を考えていくならば、労働者もそのところは考えているでしょう。その意味では大学教授とかわからないわけです。やっぱり、自分が加害者になって、又、いかなるタイプの加害者になるかという問題につきつめて行かなければ、いけないでしょう。それが、確かに、我々の前に出て来た新しい問題なのです。そういう問題をつきつめて考える様な場面として、現代の社会の中に、社会全体と対決する根拠地をつくるのができればと思います。それは出入り自由で、若い人だけでなく中年の人もそこに入ってこられるような、そういう場所であってほしい。理想的なものをつくりにくいのが、自分の人間関係の場を、少しでもそういう根拠地に近いものにしてゆきたい。つまり、身分としての知識人を洗い流せる場所、それを機能としてつくりだせる場所をつくりたい。

編集後記

一九六九年二月二十八日から三月十日まで立川基地拡張予定地内にある砂川青年の家（LBF建設）に於て、LBF・SCI・FIWCの合同ワークキャンプがもたれた。昼はラザロエクレシヤ建設のワーク、夜は「根拠地の思想を再度検討する」というテーマのもとに討論が行なわれ、三月三日、講師として鶴見俊輔氏をよび、「日本に於ける根拠地形成運動」と題して講演と討論を行った。これはその時の記録である。質問、討論は省略した。

○ 原稿はすべて七〇年以前のものである。たいへん遅れた編集後記を書くことになってしまった。

○ FIWC関西には、ロングキャンプの感想文集「一輪車」、機関誌「キャンプ風信」、交流（むすび）の家の交流紙「むす

び」などの定期刊行物があるが、理論誌として位置づけられてきた「しゃべる」は、復刊第二号が一九六四年十一月に発行されたきりで、その後出ていなかった。

○ その間、FIWC関西は、交流の家建設に着手、六七年竣工そして運営をはじめて四年、再度キャンプの旅立ち、と大きな変遷をとげてきた。

○ ワークキャンプ運動の総決算としての交流の家建設から、新たなキャンプ運動の地平にむけて、六〇年後半から七〇年代にわたる現在進行形の姿で、FIWC関西という集団をとらえる作業は、久々に出たこの「しゃべる」第三号においてはまだ整理の段階を出てないような気がする。竣工以後のさまざまな試行の過程を理論的に探ることはほとんどなされていない。引き続き刊行されねばならぬ所以である。

○ 流浪するキャンプ運動と定着した根拠地、この問題の中にはくらはまだまだいるだろう。関西だけでなく、他の兄弟グループのキャンプをとってみても、状況は似ている。

○ まぼろしの理論誌「しゃべる」復々刊（？）を契機に、常に実感信仰ベツタリのワークキャンプという集団を組む意味を考える場として、これからはもっと頻繁に出していきたい。

矢部

しやべる 第 3 号

1972 年 3 月 30 日 発行

編集 関 隆 晴 矢 部 顕

発行 フレンズ国際労働キャンプ

(F I W C) 関西委員会

奈良市中町 39 「交流 (むすび) の家」

TEL 0742 (44) 0776

TEL 0742 (44) 0776